2017年
広報よこはま
鶴見区版９月号

毎月1日発行

つるみ Tsurumi

2017 9
No.239

9月のヨミドコロ

今月の区版は、10月1日に区制90年を迎える鶴見区の歴史を、年表やその時代を駆け抜けてきた区民のお話で振り返ります。かつての鶴見の街並みや人々の生活、そして出来事。そこにはあなたが知らない鶴見があるかもしれません。

鶴見区ツイッター
区内イベント情報を発信中。ぜひフォローください！

10月1日、鶴見区は満90歳を迎えます。

今回の90周年祭には、一人でも多くの皆さまにご参加いただき、区全体で90周年をお祝いしたいと考えております。次の100周年に向け、「笑顔と元気の輪が広がるまち」を目指して取り組んでまいりますので、皆さまの一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

鶴見区長 征矢（そや）雅和（まさかず）

今年10月1日、鶴見区は区制90年を迎えます。それを記念し、区ではさまざまな催しを企画しています。中でも前日と当日に鶴見駅周辺で催される90周年祭では、各種パレードをはじめ、メリーゴーランドや光のワークショップ、寄席や子ども向け映画上映会など、大人も子どもも楽しめるイベントが盛りだくさん！ さらに２日間を通して、常設のオープンカフェやうまいもの市も登場します。鶴見区90歳の誕生日をみんなで祝い、新しい鶴見の魅力を発見してください。

特集 つるみと私

～鶴見区史90年を振り返る～

90年という長い歴史には、さまざまな出来事があり、その間に鶴見の街も人も生活も大きく変わりました。そんな激動の時代を鶴見とともに過ごした人々の話を通し、当時の暮らしや時世を振り返ります。（記事は８・９ページ）

詳細は8・9ページへ

横浜市に区ができて90年。5区そろってお祝いしよう！

鶴見区　神奈川区　中区　保土ケ谷区　磯子区

鶴見区のいま（29年8月1日現在）
人　口▶288,596
世帯数▶135,907

特集 つるみと私

～鶴見区史90年を振り返る～

昭和初期から平成までの90年間。その長い歴史には、さまざまな出来事があり、その間に鶴見の街も人も生活も大きく変わりました。そんな激動の時代を鶴見とともに過ごしてきた３人に、当時の暮らしや文化、そして思い出などを伺い、鶴見の90年の歴史を振り返ります。

鶴見配氷池

尻手駅前

鶴見駅西口

２代にわたりこの地で85年、呉服店を営んできた石原さん

佃野 街頭テレビに映画館、商店街にはいつも人々が集っていた ～石原修二さん（77歳）～

佃野商店街「三河屋呉服店」店主

森永工場への爆弾投下で商店街は壊滅状態に

親父が呉服屋を佃野商店街で始めたのが、戦前の昭和７年。そこで私も生まれましたが、幼少期に戦争になったことで一旦は名古屋に疎開し、鶴見に戻ってきたのは小学生の時でした。特に戦火では、すぐ横にあった森永工場が集中的に爆撃を受けたことで、そのあおりを受け商店街はほぼ壊滅状態でしたね。

それでも親父は佃野に戻ると、そこでまた一から店舗を建てて、商売を始めたんです。ただ、戦後間もなくはまだ物資がないため、食品も衣類も買うには配給用の券が必要でね。うちの店にも衣服を求めて、券を持った人が列をなして並んでいたのを覚えています。

街頭テレビに人が群がり、映画館は憩いの場だった

30年代頃からは商店街も活気を取り戻し、年末などは買い物客で身動きできないほど賑わいました。当時はまだ商店街の道も舗装されておらず、人が大勢通ると砂ぼこりが舞ってね。そんな商店街の道の真ん中をバスが通っていたんですから、今では考えられない光景ですよね。それと当時は店のすぐ横に街頭テレビが設置され、プロレス中継などを観に多くの人だかりができていました。

また、商店街の中心にはレアルト劇場という映画館があって、私も「シェーン」などの洋画をよく観にいったものです。当時の商店街はいつも人々が集まる、まさに憩いの場でしたね。そんな映画館もテレビの普及などで次第に客足が遠のき、その後はストリップ劇場に姿を変えてね。そこの踊り子さんたちが、よくうちに衣類を買いに来ていましたよ。ちなみに、「レアールつくの」という今の愛称は、当時のレアルト劇場にちなんだものとも聞いています。

将来的にまた商店街にも賑わいが戻ってくれたら

今こうして商店街を眺めても、辞めた店や代わった店も多く、うちの店が一番古株になってしまった。店主の高齢化が進む中、それは仕方ないことですが、どういう形であれ、また商店街にかつての賑わいが戻ってくれたらと思います。

鶴見区もあと10年で100歳を迎えますが、それまでに商店街もまた元気を取り戻し、次の100周年を一緒に祝えたらいいですね。

バイクに乗る２人の後ろに見えるのが当時の三河屋呉服店（昭和26年）

車も増え、拡幅工事が進む末吉通り（昭和30年頃）

駅舎がまだ高架化される前の京急鶴見駅（駅名も「京浜鶴見駅」だった（昭和27年）

鶴見駅東口のバスターミナル。当時はボンネットバスが主流だった（昭和26年）

商店街にあった映画館、レアルト劇場（昭和30年）

国鉄鶴見駅西口（現在、フーガのあるあたりは道路だった（昭和30年頃）

第二次世界大戦中、豊岡通りでラジオ体操をする子どもたち（昭和19年）

【鶴見区90年の歩み】

昭和
- 2年（1927）鶴見町、旭村が横浜市に合併
- 3年（1928）鶴見区が誕生（人口6万2446人）
- 18年（1943）鶴見線が国有化
- 20年（1945）川崎大空襲（4月15日）横浜大空襲（5月29日）
- 21年（1946）児童遊園地「花月園」が閉園
- 25年（1950）花月園競輪場が開場
- 29年（1954）鶴見工業高校が夏の甲子園に初出場
- 三ツ池公園が開園
- 31年（1956）横浜市が政令指定都市に指定
- 33年（1958）第二京浜国道が全通
- 狩野川台風で鶴見川が氾濫
- 38年（1963）国鉄鶴見事故（死者161人）
- 41年（1966）市電生麦線が廃止
- 42年（1967）鶴見川が一級河川に指定
- 49年（1974）大黒大橋が開通
- 50年（1975）獅子ケ谷市民の森が開園
- 52年（1977）区制50周年（人口23万7678人）
- 55年（1980）鶴見図書館が開館
- 60年（1985）鶴見公会堂が開館
- 62年（1987）区制60周年（人口24万3751人）
- 63年（1988）鶴見区総合庁舎が完成
- 鶴見区のマスコット「ワッくん」が制定
- 横溝屋敷が市指定文化財第1号に指定
- 平成 元年（1989）ベイブリッジ・スカイウオークが完成
- 2年（1990）大黒ふ頭の埋立てが完成
- 3年（1991）鶴見区のシンボルマークが制定
- 4年（1992）ワイルドブルーヨコハマがオープン
- 区の花に「サルビア」が決定
- 6年（1994）高速湾岸線（鶴見つばさ橋）が開通
- 8年（1996）大黒海づり公園が開園
- 9年（1997）高齢者保養研修施設「ふれーゆ」が開館
- 区の木に「サルスベリ」が決定
- 11年（1999）馬場花木園が開園
- 12年（2000）理化学研究所「横浜研究所」が発足
- 16年（2004）国道357号線が開通
- 19年（2007）区制80周年（人口26万7447人）
- 「つるみみやげ」選定
- 21年（2009）横浜サイエンスフロンティア高校が開校
- 22年（2010）花月園競輪場が閉園
- 23年（2011）鶴見国際交流ラウンジが開館
- 区民文化センターサルビアホールが開館
- 24年（2012）鶴見駅駅ビル「シアル鶴見」が開業
- 27年（2015）二ツ池公園が一部整備され公開
- 28年（2016）鶴見駅東口駅前広場の整備が完了
- 白井健三選手（鶴見出身）リオ五輪で金メダル獲得
- 29年（2017）横浜北線が開通し、岸谷生麦線が利用開始
- 区制90周年（人口28万8598人）

来館者には生麦事件について丁寧に説明してくれる浅海館長（要予約）
【問生麦事件参考館☎503-3710】

生麦 あの「事件」も「事故」も私の一部。生麦とともに歩んだ人生 ～浅海武夫さん（86歳）～

生麦事件参考館館長

棒手振りさんが行き交ったかつての生麦

私が生まれたのが、鶴見区が誕生して３年後の昭和５年。生まれも育ちも生麦なので、生粋の鶴見っ子ですね。生麦といえば魚河岸が有名ですが、戦前はまだ漁師町で主に赤貝、ミル貝などがとれたことで、それを桶に入れ天びん棒で担ぎ、山側まで売りに行く棒手振りさんが行き交っていました。その人たちが休憩した場所が、今も佃野商店街にぽてふり地蔵として残っていますね。

実家が酒屋だったこともあり、学生時代から店の手伝いをしていましたが、そのまま店を継ぐのには抵抗があってね。歴史が好きだったこともあり、大学卒業後に再度、別の大学へ入学し、日本の近代史を学びました。当時は、それが後に生麦事件をひも解く自身のライフワークにつながるとは、まだ知るよしもなかったですが。

忘れられない「鶴見事故」の一夜

その後、店を継ぎ、33歳のときに結婚しましたが、その年の11月にあの大事故が起きたんです。死者161人を出した国鉄の鶴見事故です。私はその夜、いつものように店番をしていましたが、何だか騒がしいので外へ出てみると、目と鼻の先で電車が脱線したらしいと。急いで現場に行くと、そこには大破した車両とともに、足を挟まれて泣き叫ぶ人、宙ぶらりんで意識のない人、それはもう地獄絵のようでした。その場にいた私も駆り出され、乗客を車外へ運び出しました。担架がないので、列車の座席を外してそれに人を乗せて何往復も運んでね。近所の人も家のシーツを持ってきては包帯代わりにして、みんなで協力し合い助けました。結局、救助活動を終えたのが明け方で、気づくと服全体が真っ赤だったのを覚えています。あの夜の出来事は、一生忘れませんね。

国鉄史上、類のない大事故となった「鶴見事故」（昭和38年）

「生麦事件」を風化させず、後世に伝えるのが使命

もう一つ、生麦といって欠かせないのが、生麦事件です。私がこれに携わるきっかけとなったのが、たまたま事件碑を案内した鹿児島の人から、後日届いた一通の手紙でした。そこには、「なぜこんな大きな事件なのに資料館がないのか？」と書かれてました。

以来、私は歴史好きということもあり、国内はもとよりイギリスやオランダからも資料を集め、事件について調べ尽くしました。そして、平成６年に生麦事件参考館を自宅横に開館。以後、全国からたくさんの人がここを訪れ、多くの人に事件のことを知ってもらっています。今後もこの参考館を通し、生麦事件を風化させずに一人でも多くの人に事実を知ってもらう。それこそが私の使命であり、地元、生麦への恩返しだと思っています。

今年90歳を迎えた横溝和子さん。愛犬の散歩も日課のひとつ

獅子ケ谷 移りゆく自然を感じ、鶴見とともに歳を重ねた日々 ～横溝和子さん（90歳）～

横溝家第17代目当主

手つかずの自然が残っていたかつての獅子ケ谷

生まれは東京ですが、結婚をして獅子ケ谷に移り住みました。鶴見というと古くから市街化されているイメージがありますが、獅子ケ谷あたりは昭和30年代頃まで手付かずの自然が残っていて、夜になるとカエルの合唱がうるさいほど鳴り響いていました。家の前には稲穂がそよぐ田んぼが一面に広がり、その脇にはメダカやミズスマシが泳ぐきれいな小川が流れている。そんなのどかな風景も、街の都市化とともに徐々に消えていき、今は家の裏山である市民の森が唯一手つかずの自然となってしまいましたね。

便利過ぎず手間のかかる暮らしの方が体にはいい

現在、市の指定文化財である横溝屋敷には、横溝家に嫁いでから市に寄贈する昭和の終わり頃まで、私たち家族が住んでいました。かやぶき屋根に土間といった昔ながらの家屋での生活は少し不便さもありましたが、今思うと便利過ぎず少し手間のかかる暮らしの方が実は体にはいいのかなと。当時は、長い廊下を毎日水拭きしたり、窓ガラスを拭いたり、障子の張り替えや畳のひなた干しなどもすべて家族でやるというのが当たり前でしたから。一日が瞬く間に過ぎる毎日で、余暇を楽しむ余裕などありませんでしたね。

そのうち、子どもたちも成長し、手が離れたので始めたのがコーラスです。今も３つの団体に所属していますが、健康の秘訣は人に接することと歌うこと。いろいろな年代の人とかかわりながら、お腹から思い切り声を出すのが、体にいいのかもしれませんね。

次世代のためにも貴重な緑を守っていきたい

この７月に私も90歳を迎えましたが、鶴見と一緒に歳を重ねてきたことが、偶然とはいえ何か深いご縁があるように思います。区制90周年の次はいよいよ100周年ですが、私も次は白寿を目指すと先日、家族に宣言したところです。

そんな私が今、危惧しているのが、街から自然がどんどん減っていること。昔に比べ、格段に緑が減ったと感じます。自然を壊すのはいとも簡単ですが、それを作り上げるのはとても大変なことです。次世代を担う子どもたちが自然の中でいきいきと暮らせる、そんな鶴見区になるよう、私たち大人が小さなことからでもコツコツと実践し、今ある緑や自然を守っていくことが、大切だと思っています。

前が一面田んぼだった横溝屋敷（昭和30年代）